



TITLE:

李賀とその詩

AUTHOR(S):

川合, 康三

CITATION:

川合, 康三. 李賀とその詩. 中國文學報 1972, 23: 65-81

ISSUE DATE:

1972-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177287>

RIGHT:

李賀とその詩

川 合 康 三

京 都 大 學

中唐の詩人李賀(791~817)は異常な幻想的世界をうたつたことで、中國文學史上、特異な存在を認められている。

玉川(盧全・?~883)の恠、長吉の瑰琬、天地の間自ずから此の體を缺くこと得ず。

(嚴羽『滄浪詩話』「詩評」)

たしかに彼は「物象を越えた」⁽¹⁾世界を好んでうたう。しかし同時に李賀は、現實の生活の中で激しく揺れる心の動きを、例えば彼の一面を繼承する李商隱(812~886)の隱微な、韜晦したうたいぶりに較べたら、驚くほど率直にうたつてもいるのである。小論の前半では彼の詩句を手懸かりとし

李賀とその詩(川合)

て、二十七歳で死んだ「鬼才」の生身の人間としての姿をさぐつてみた。

李賀の生涯の中で最も大きな事件、それなしには李賀を考えられない決定的なできごと、それは彼の二十歳の時に起つた。元和五年、河南府試に合格して進士受験のため長安に上つた李賀は、父の名が晉肅であるから進士になるのは父の諱を犯すことになるという誹謗を受け、韓愈『諱の辯』の駁論も空しく、昌谷の里に歸つたのである。

——父名晉肅、以是不應進士。韓愈爲之作諱辯。賀竟不就試。(『舊唐書』李賀傳)

自己の可能性に大きな自信をもつ青年が、その可能性を發揮すべき最初の段階において、自分の力ではどうしようもない力によつて、それをもぎとられてしまったのである。後年、李賀自身、

枉辱稱知犯君眼 枉げて知と稱するを辱なくして君

が眼を犯す

排引纔陸強絀斷

排引 纔かに陞れば強絀斷ゆ

洛風送馬入長關

洛風 馬を送つて長關に入れば

闔扇未開逢猥犬

闔扇 未だ開かざるに猥犬に逢う

〔仁和里雜敘皇甫湜〕

と、そのことを暗示的に追憶する。また、

二十心已朽

二十にして心已に朽ちたり〔贈陳商〕

我當二十不得意

我れ二十に當つて意を得ず

〔開愁歌〕

彼は二十という年が、自分の人生の中で特別な意味をもつ年齢であると考えていたのかもしれない。しかし李賀は、この時潔く官をあきらめ、別に己を已たらしめる道をみつめて歩み始めたのでは、なかった。彼は死ぬまで官に執着し続けたのである。

致酒行

零落棲遲一杯酒

零落棲遲 一杯の酒

主人奉觴客長壽

主人觴を奉ず客長壽なれ

主父西遊困不歸

主父西に遊び困して歸らず

家人折斷門前柳

家人は折斷す 門前の柳

吾聞馬周昔作新豐客

吾聞く 馬周 昔 新豐の客と

作り

天荒地老無人識

天荒地老 人の識る無し

空將牋上兩行書

空しく牋上の兩行の書を將つて

直犯龍顏請恩澤

直ちに龍顔を犯して恩澤を請う

我有迷魂招不得

我に迷魂有りて招き得ず

雄雞一聲天下白

雄雞一聲 天下白む

少年心事當拏雲

少年の心事當に雲を拏むべし

誰念幽寒坐鳴呃

誰か念わんや 幽寒に坐して鳴呃するを

『文苑英華』卷三三六に載せるこの詩の題下に「至日、

長安里中作」とあるのを信ずれば、長安滞在中の作である。

「開愁歌」の末兩句にも「主人 我に勸む 心骨を養い、

俗物の相填敷するを受くる莫れと。」と、旗亭の主人が李

賀を勇氣づけるが、この詩でも、漢の武帝に認められるまで貧しい客居を續けた主父偃の話をもちだして垂翅の詩人を慰める。それに對して李賀も、食客として處ること久しかった馬周が、主人の爲に代筆した文章が唐の太宗に認められ、即日召されて官を授けられた話を思い起す。

「零落棲遲」の今の生活、「坐鳴呃」のこの状態、それから抜け出して天子にまみえたいと願うのは、「長歌續短歌」の、

秦王不可見 秦王 見る可からず

旦夕成内熱 旦夕 内熱を成す

にもあらわれ、上奏文を以て採用を期待する氣持ちは「仁和里雜敘皇甫湜」にも、

欲離小説干天官 小説を離して天官に干めんと欲す

という。さらに「客遊」に

不謁承明廬 承明の廬に謁せず

老作平原客 老いて平原の客と作る

李賀とその詩（川倉）

とうたうのが、朱自清によれば元和十一年⁽²⁾、つまり死の前年、潞州での作であるのをみれば、官を得ることを最後まであきらめきれなかつたように思われる。

李賀は一生布衣で終つたわけではない。諱の事件の翌年、元和六年に長安に出て奉禮郎の官を得ている。しかし、その時の詩「始めて奉禮と爲り昌谷の山居を憶う」の李賀は、異土の生活なじみがたく、寂寞を噛みしめながら故郷に思ひをやつてゐるのみである。

鶴病悔遊秦 鶴病 秦に遊びしを悔ゆ

初めから官を得た喜びなどない上に、「奉禮は官卑し……」（「聽穎師彈琴歌」）、從九品上その官職に不満はつるばかりである。

禮節乃相去 禮節 乃ち相去り

顚顚如鴛狗 顚顚 鴛狗の如し

風雪直齋壇 風雪 齋壇に直し

墨組貫銅綬 墨組 銅綬を貫く

臣妾氣態間 臣妾 氣態の間

唯欲承箕箒 唯だ箕箒を承けんと欲す〔贈陳商〕

微官に甘んじて卑屈な態度をとらねばならぬことは、ブライドの高い李賀（そのことは後に述べる）にとつて、堪えられぬことであつた。翌々年の春には病氣という理由で官を辭し昌谷に歸るのだが、その年の秋、より高い地位を求めてまた長安に上つてゐる。その際の詩、「昌谷よ自り洛の後門に到る」の末兩句にいう、

爲探秦臺意 爲に探れ 秦臺の意

豈命余負薪 豈に余に薪を負うを命ずるやと

朝廷が己を認めることに、一縷の望みを捨てきれないのである。

ところで、李賀のこのような官への希求には、政治そのものへ直接參與しようとする志、具體的に政治の實踐者た然とする抱負は、みられない。「自昌谷到洛後門」の詩にいう、

始欲南去楚 始め南のかた楚に去ゆかんと欲し

又將西適秦 又 將に西のかた秦に適ゆかんとす

襄王與武帝 襄王と武帝と

各自留青春 各自 青春を留む

王琦の注に「楚地に襄王有り、秦地に漢の武帝有り。皆な古來文を好める主なり。」⁽³⁾李賀は漢の武帝の下(3)の司馬相如の如く（唐代の詩人にとつて司馬相如は文學者の典型であつたようだ）、「好文之主」の下で「能文之士」⁽⁴⁾たらんと願つたのであろう。名君の下、文學者として仕え、己の文學における能力を廣い場所で顯示することこそ、彼の願ひであつたと考えられる。

「我れ雙綬まことを紆まことうを待つ」〔感諷其二〕という李賀の官への願望、それはわずかな望みを感じつつしかもかなえられないことによつて、一層熱烈なものとなつて彼の心を轢やかにさせないのであるが、その基となつてゐるのは彼の自らの才能に恃む大きな自負である。「馬詩」二十三首は自己を名馬にたとえ、認める者の無い名馬の不幸を様々な

ヴァリエーションをもつてうたうのだが、己の名馬たることの搖ぎない自信のために、彼の詩としては珍らしくカラッとした明るささえ感じられる。たからかに名馬たることをうたい、名馬を認める者の無いことをうたい、そして名馬の不遇をうたう。不遇は彼の自負をいよいよ肥大させ、鋭くする。與えられた状況の中で、彼は自己に恃むしかなかったのである。

才能への自負についてみる時、切り離せないのは、唐の宗室、鄭王の後裔であるという彼の誇りである。才能を自負せねばならなかったことが、家柄の誇りを導き、家柄の誇りが才能の自負を増す。彼が詩の中でことさらに祖先の出身地を舉げて唐室王孫を意識する二つの句を引いてみよう。

隴西長吉摧顏客　隴西の長吉　摧顏の客

（酒罷、張大徹索贈詩、時張初效潞幕）

刺促成紀人　刺促たり成紀の人（昌谷詩）

『四庫全書總目提要』卷一百五十「昌谷集四卷外集二卷」

李賀とその詩（川倉）

の項にいう、「賀の系は鄭王に出づ。故に自ら郡望を以て隴西と稱す。實は則ち昌谷に家す。」

二句をみて氣付くことの一つは、どちらも自分のことを第三者として客觀視しようとしていること、もう一つは「隴西長吉―摧顏客」「刺促―成紀人」と、名家の出である己と、それにふさわしからぬ不如意な状態とを對比させていることである。己の誇りを強く意識することは同時に己の今の不遇、貧しさの意識となつてはねかえつてくる。

例えば泰西の詩人バイロンが美貌であると同時に跛足であり、貴族であると同時に母子二人のしがない田舎暮らしの幼年時代をもつたように、李賀も「隴西の長吉―摧顏の客」と相反する二つのものを同時にもつことによつて、そのいづれをもより一層鋭く意識せざるをえなかつたのである。

しかし李賀は文學に對する自負とともに、それにしがみついていなければ己の存在が消滅してしまうような切實なものとして、名家の家柄であることを誇る。諱の事件の決定的な打撃によつて生まれた「自分だけが特殊な状況におかれている」という認識、それをそのまま李賀は「自分は

人と違つている」という優越の認識に轉換させるのである。

昌谷北園新笋 其一

籜落長竿削玉開 籜落ちて長竿 削玉開く

君看母笋是龍材 君看よ 母笋は是れ龍材なるを

更容一夜抽千尺 更に容す 一夜千尺を抽きんで

別却池園數寸泥 池園數寸の泥に別却するを

朱自清によれば、元和八年、官を辭して昌谷に歸つての作である。⁽²⁾「母笋は是れ龍材」——これも唐の王室につながる家系をもつことをいつているようによめる。「此れ賀、竹を借りて以て自負する也。玉質削立し、本は是れ龍種なり。倘し一宵にして變化すれば、自ら塵滓より青冥の上に出でん。」(姚文燮『昌谷集註』卷二)

「池園數寸泥」とは今の彼の不本意な生活のことだろうが、それを「別却」するとは、昌谷の里で家族と共にする生活の煩しさから解放されたいという氣持ちを反映しているように思われる。はやく父を失つた李賀は、⁽⁵⁾おそらく母

親の愛情と期待とを一身に受けて育つたであろう。期待は物質的な期待をも含んだ。

家門厚重意 家門 厚重的意

望我飽飢腹 我に望む 飢腹を飽かしむるを

(「題歸夢」)

それは彼にとつて重荷にほかならない。それをおもうと、もはや寢付かれないと續けていう、

勞勞一寸心 勞勞たり 一寸の心

燈花照魚目 燈花 魚目を照らす

奉禮郎を辭し、長安を去つて「春、昌谷に歸る」詩では、途中の景物を敘したあと、

少健無所就 少健 就る所無し

入門愧家老 門に入りて家老に愧ず

家老とは「ここではその母を指す。」(葉葱奇)⁽⁶⁾自分のふがいなさ、それを家に着くとまず母に對して恥じねばならなかつたのである。

昌谷に歸つた彼は、口減らしのために弟を他所に預けなければならなかつた。「勉愛行二首、小季が廬山に之くを送る」其二に、

欲將千里別　千里の別を將つて

持此易斗粟　此を持して斗粟に易えんと欲す

一家の生活を支えていかなければならない責任、それは結果として果たしえなかつたけれども、その責任をあつさり回避して自分の詩の世界に没頭できる人間で、李賀はなかつた。「感春」の詩の一句に、

花悲北郭驢　花は悲しむ　北郭驢

北郭驢とは『呂氏春秋』士節篇などにみえ、王琦がいうように「罽網を結び、蒲葦を捆り、屨履を織りて、則ち其の母を養」つた人であり、陳本禮は「長吉、母有りて家貧し。故に北郭驢を以て自ら比す」と注する。李賀が官を求め続けなければならなかつた理由の、大きな一つはここにあるであらう。

李賀とその詩（川倉）

李賀の愛讀した詩人屈原は、世に對する激しい抗議として、自ら命を斷つた。しかし、家族を支えていかなばならぬ李賀にとつて、自殺はなしうることではない。次に擧げる詩では樂府の體裁を借りて、暗にそのことをうたう。

筵篋引又曰公無渡河

公乎公乎　公や公や

提壺將焉如　壺を提げて　將に焉くに如かんとす

屈平沈湘不足慕　屈平　湘に沈む　慕うに足らず

徐衍入海誠爲愚　徐衍　海に入る　誠に愚と爲す

公乎公乎　公や公や

牀有菅席盤有魚　牀に菅席有り　盤に魚有り

北里有賢兄　北里に賢兄有り

東隣有小姑　東隣に小姑有り

隴畝油油黍與胡　隴畝　油油たり　黍と胡と

瓦甌濁醪蟻浮浮　瓦甌　濁醪　蟻浮浮たり

黍可食　黍は食う可く

醪可飲　醪は飲む可し

公乎公乎

公や公や

其奈居

其れ 奈居いかん

被髮奔流竟何如

被髮 流れに奔り 竟に何いか如

賢兄小姑哭鳴鳴

賢兄小姑 哭して鳴鳴

李賀には故事や樂府題を借りて單に物語として再構成した詩がかなりあるが、この詩はそれらと異なり、彼の心情を讀みとつてよいと考える。「楚辭 肘後に繋る」(「贈陳商」詩)と座右から離さなかつた『楚辭』の、屈原の生方を彼はしばしば自分と引比べたであろうが、その屈原の名を第三句でいきなり投げだして「慕うに足らず」といひきつてゐるところに、彼の心がのぞかれる。想像を許されるならば、李賀には死への衝動があつたのではないかと思われる。「時として彼を襲う激しい虚無感」(荒井健氏『李賀』解説)に浸された状態で、生無きに如かずと何もかも抛擲したくなることがあつたのではないか。しかしその際には、詩を作るという營みさえ無論できはしないわけで、氣持ちが「谷」を脱した時に「生くるは死ぬに愈る」(曾益注)⁽¹⁾

のだと己にいいきかすかのようにうたつたのが、この詩である。賢兄小姑、それは賢母小弟にほかならない。(彼の詩中にはつきり現われる家族は母と弟のみである。)少なくとも母と弟はいたであらう家を支えていくために、現實の生活の重苦しさに耐えて彼は生き續けなければならぬ。「感諷」其二には深夜の墓場の景をうたうが、それが夜の奇怪な妄想であるとすれば、あたかも妄想から醒めて朝を迎え、再び地上の生活に向かい合つたかのように其四にはいう。

星盡四方高	星盡きて 四方高し
萬物知天曙	萬物 天の曙くるを知る
已生須己養	已 <small>すで</small> に生ずれば須らく己 <small>みづか</small> ら養うべし
荷擔出門去	荷擔して門を出でて去る
君平久不反	君平 久しく反らず
康伯遁國路	康伯 國路より遁る
曉思何譙譙	曉に思ふ 何ぞ譙譙たる
闔闔千人語	闔闔 千人の語

君平、康伯、いずれも單なる隱者ではない。兩者に共通するのは一方は易者、一方は藥屋と、世俗で生業に就きながらしかも俗に染まらず、己を全うしえたことである。彼らが占いをし藥を賣つた市場、その騒がしさに詩人は違和感を覺えるのみなのだが、「已生須己養」の一句は李賀の抱いた諦觀のようによめる。「荷擔」から解かれることのない生、が、やはりそれでも、この世に生を享けた以上、自分の手で生計を立て、生き續けるしかない、と。

朱自清によれば元和八年、官を辭して昌谷に戻つた時の作とする「昌谷詩」、昌谷の景物、里人の愛すべきことを長く述べたあと、次の二句で結ぶ。

刺促成紀人 刺促たり 成紀の人
好學鴟夷子 好し學ばん 鴟夷子

前句については先に述べた。ここでみるのは「鴟夷子」の故事である。『史記』「越王勾踐世家」によれば、越が吳に雪辱を果たしたあと、越の臣范蠡は上將軍の稱を辭し

李賀とその詩（川合）

て齊に行き、名を鴟夷子皮と變えた。「海畔に耕し、苦身戮力して、父子 産を治む。居ること幾何も無くして、産を致すこと數千萬。」すなわち、鴟夷子とは官を辭し俗世間に生きて成功した人間である。それに學ぼうという李賀の氣持ちがそのまま本心であるとは決められないにしても、官を求めてこせこせするより、穩やかな昌谷の里にこのまま落ち着いて生業に攜わろうかという方向に彼の心が動いたことは考えられる。一時の心の動きであるにしても、李賀は實生活から完全に背を向けてしまつたわけではないことに注意しなくてはならない。彼の心は地上の生活の中ではかりの指針のように激しく揺れ動いてやまなかつたのである。彼の築いた豊富なイメージの詩的世界が、單なる虚しい、空疏な言葉の堆積とならなかつたのは、現實の生活の中での詩人の懊惱、苦悶があつたからこそであり、現實への怨恨、そこに生じた心の激しい動き、それがなかつたならば、彼の豊かな詩的世界の源泉は涸渇してしまつたであらう。

彼は結局「鴟夷子」にもなりえなかつたし、「司馬相如」

にもなりえなかつた。しかし「李賀」になりえた李賀の、その特徴の一つとして彼の詩の感覺的な面について小論の後半で考えてみたい。

二

少年の李賀の詩才を認めた韓愈が「文を以て詩と爲す」といわれたのと對蹠的に、李賀はいくつかの感覺の微妙で複雑なからみあいによつて生まれるイメージを、その詩の特徴とする。

例えば次の詩をアリストテレス以來の感覺五分法（視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺）によつて分けてみよう。

貴公子夜闌曲

裊裊沈水煙	裊裊たり	沈水の煙（視・嗅）
烏啼夜闌景	烏は啼く	夜闌の景（聽・視）
曲沼芙蓉波	曲沼	芙蓉の波（視・聽）
腰圍白玉冷	腰圍	白玉冷なり（視・觸）

四句の中に四種の感覺を認めることができる。感覺論哲學を築いた E. B. Conillac はデカルトを皮肉つて：「Je sens, donc je suis」（われ感ず、故にわれ在り）といったというが、その言葉はこの詩の爲にあるかのように、これは純粹に感覺だけで成り立つている詩の世界である。

彼の詩中に頻出する感覺的な語の中でとりわけ目立つのは、香・芳・馨など嗅覺に屬する語と、濕・冷・寒など觸覺に屬する語である。嗅覺、觸覺という日常生活の中では依存度の低い最も原始的な感覺、原始的であるゆえに最も根源的な感覺、それを尖鋭にすることによつて、李賀の感覺は日常的な感覺を超える。香りについてみる時、その時代の文化を考慮してみなければならぬ。『萬葉集』に花をうたつた歌は多いが、花の香りを詠んだ歌はわずかに二首のみであり、香りに對する好尚がみられるのは佛教渡來以後、香料が生活に浸透してからであるといふ。¹²そして唐の時代は香料がさかんに愛好された時代であつた。しかし同時代の韓愈と較べてみた場合、李賀にはば五倍の率で香りに關する字があらわれることから、彼がとりわけ匂

いをうたうことを好んだということが出来る。その三分の一強は香料についての香りであり、三分の一弱が植物の香りである。例えば竹の香りについて、いう。

衣を侵して野竹香し

〔感諷其五〕

竹香 凄寂に満つ

〔昌谷詩〕

果たして竹に香りがあるのか——。韓愈の竹の香りをうたつた詩について、蔣之翘はいう。

杜(甫)の竹詩に「雨洗うて娟娟として淨く、風吹きて細細として香し」と有り。前輩嘗て云う、竹未だ嘗て香有らず。而るに少陵、香を以て之を言うと。豈に知らんや、公(韓愈)にも亦た「水に落ちて紫苞香し」の語有るを。(蔣石林先生注評『韓柳全集』の『韓昌黎集』卷九「竹溪」詩注)

また明の楊慎は杜甫の「雨洗娟娟淨、風吹細細香」と李賀の前掲の句などを擧げていう、「竹も亦た香有り。細やかに之を嗅げば乃ち知らる。」(『升菴詩話』卷三「竹香」の條)

李賀とその詩(川倉)

日常的な感覚で詩の中の感覚を捉えようとすると、右のような言葉を生むことになる。李賀の感覚は日常生活における感覚を先取りするような感覚であり、刺香―菖蒲の葉の尖つた先端の香り―(新夏歌)などはその極端な例といえよう。

同じことは、湿、及びそれに類する沾、濡、濡の字についてもいうことができる。過去の用例において、それらもつばら「涙が衣をぬらす」という一つの常套的なパターンの中で使われることが多いが、李賀の用法は特殊である。例えば月の光について「寒兔を濕す」(「李憑箏篋引」)、「團光を濕す」(「夢天」)と彼はいう。日常的な「しめつた」感覚で捉えられるのは「洞堂 濕う」(「羅浮山人與葛篇」)ぐらいのものであり、『文選』、杜甫などに用例がみえない濕蛭、濕蛄、濕雲など、⁽¹³⁾濕字をエピソードとして新しいことばを作っているように、李賀は普通の感覚を超越し、自由な感覚的聯想によつて「濕」を用いているのである。

「長吉は又好んで代詞を用い、肯て物の名を直説せず」とは錢鍾書氏の『談藝錄』にみえるが、⁽¹⁴⁾その代詞も感覺をあらわす二字からなるもの、ないしは少なくとも一字は明らかに感覺的な字であるものが多い。例えば、

冷紅（秋の花） 「南山田中行」

寒綠（春の草） 「河南府試十二月樂詞・正月」

細綠（細かな草） 「春歸昌谷」

團紅（紅い花のかたまり） 同右・「石城曉」

顏綠（ぐずれそうな緑の樹木） 「昌谷詩」

細青（稻） 同右

鮮紅（荷の花） 「月漉漉篇」

幽紅（春の花） 「感諷」其一

青光（竹） 「昌谷北園新笋」其二

玉青（新竹） 同右其三

などである。このように感覺的な語によつて、或いは感覺的な聯想によつて物の名の代わりとすることは、李賀が

對象を「概念」としてではなく、「感覺」として捉え、感覺から「もの」を再構成したことを意味する。「代詞」と名付けるといかにまわりくどい詩的修辭のようであるが、實はそれは感覺語をそのまま投げつけたものであり、極めて直截な表現であるときえいうことができよう。例えば韓愈の「南山」詩は「或：若」を繰りかえして執拗に描寫するが、李賀は感覺的な代詞をなげつけて喚起させるのである。李賀の代詞とは典型的な隱喩にほかならない。

これまで李賀の感覺を述べるのに、便宜上觸覺・嗅覺などと分類してきたが、實は李賀には「未分化の感覺」といふべきものが認められる。

露重金泥冷。露重くして金泥冷かなり（答贈）

金という色彩、その視覺的な感覺を、今の感覺心理學の分類に従えば皮膚感覺と總稱されるもののうちの一つ、冷覺で感じているのであり、⁽¹⁵⁾同様に

金鳳刺衣著體寒。

金鳳の刺衣 體に著きて寒し

〔河南府試〕十月

深幃金鴨冷。

深幃 金鴨冷なり〔蘭香神女廟〕

も、金という視覚から寒、冷という冷覺を感じているといえるだろう。また銀についても

御牋銀沫冷。

御牋 銀沫冷なり〔梁公子〕

を擧げることができる。

錢鍾書氏が曲喩の例として擧げる⁽¹⁶⁾、

義和敲日玻璃聲

義和 日を敲く 玻璃の聲

〔秦王飲酒〕

荒井氏の「解説」を引けば「どちらも光るものだから太陽をガラスにたとえ、さらにガラスから連想して太陽にむち打つて音を立てさせる」のであるが、ここにも未分化の感覺というべきものが認められるのではないかと思われる。太陽という光の物體、その鋭い、硬質な光の感覺は、玻璃

李賀とその詩（川合）

の聲という、鋭い、硬質な音の感覺を伴なつて彼に感じられたのではないだろうか。未分化の感覺というものについて、今日の日本の詩人の言葉がある。

「二十歳前の人間の感受性は、すべての事物に對する反應が組織化されていない。極めて未分化な状態にあるのだ。色彩や音が互いに入り混じり、ほんのかすかなものの匂いにおびただしい印象が甦つてぼくらの息をつまらせる。感受性自體がきわめて肉感的な状態にある時代だ。一つの事物の印象が、この年代に特有の自足的な存在感覺の中であまたの印象をよびさしながら音楽のようにながらいつてゆく。……」（大岡信『現代詩人論』113ページ）

異つた感覺が共鳴しあうのは、西歐ではロマン派詩人にみられ、そこに匂いという要素を加えそれに重點を置いたのはボードレーからだ⁽¹⁷⁾という。李賀の嗅覺と冷覺・溫覺を結びあわせたものには、

寒。香。解。野。醉。 寒。香。 野。醉。を。解。く。〔石城曉〕

熟。杏。暖。香。 梨。葉。老。 熟。杏。 暖。香。 梨。葉。老。ゆ。〔南園〕

がある。⁽¹⁸⁾ 色彩を表わす字と皮膚感覚を表わす字とを結びつけた語句は、李賀の詩中に頻出する。寒緑、冷紅などはす

でに代詞のところに挙げた。さらに、

白玉冷。 白玉冷なり。〔貴公子夜闌曲〕

冷。翠。燭。 翠。燭。冷。かに。〔蘇小小歌〕

細露濕。團紅。 細露。團紅。を。濕。す。〔石城曉〕

玉煙青。濕。白如幢。 玉煙。青く。濕。う。て。白。幢。の。如。し。

〔谿晚涼〕

などであり、また次の一句、

日脚淡光紅灑灑。 日脚の淡光。紅くして灑灑

〔河南府試・十二月〕

「灑灑」について曾益は「光の散ずる貌」と注し、葉葱⁽¹⁹⁾

奇は「寒慄の貌」というが、その兩方の意を含むオノマト

ピアではないかと思われる。鈴木虎雄博士が「チャカチャカとそそぐさま」と注しておられるように、冬の日の淡い光の、冷たくふりそそぐのを *so-so* という音であらわしたのである。視覚、冷覚、聴覚のからみあつた語といえよう。

一句の中に重―寒、重―冷、重―濕、濕―冷などの二字が組み合わされてあらわれる詩句、すなわち皮膚感覚と總括されるものの中の、二種の感覚が同時に、相互依存的に感覺された詩句、それは手近に索引のある『文選』、王維、李白、杜甫、韓愈⁽²²⁾にはみえないものだが、李賀にはいくつか挙げられる。

霜重。鼓寒。聲不起。 霜重く鼓寒くして聲起こらず

〔雁門太守行〕

骨重。神寒。天廟器。 骨重く神寒く天廟の器なり

〔唐兒歌〕

玉冷。紅絲重。 玉冷にして紅絲重し〔馮小憐〕

露重。金泥冷。 露重くして金泥冷なり〔答贈〕

煙濕愁車重。 煙濕いて車の重きを愁う（「花遊曲」）

旗濕金鈴重。 旗濕いて金鈴重し（「追賦畫江潭苑其四」）

露脚斜飛濕寒兔。 露脚 斜に飛びて寒兔を濕す

（李憑箏篋引）

最後に、李賀の詩集を漫然と讀んでいても目にとまる、

もう一つの特徴的な用法の字として「斜」が挙げられる。

數の上でも、王維に10字、李白7字、韓愈7字、そして李賀には18字と、全字數に比して李賀に特に頻度が高く、しかもしばしば太陽の西に傾くことをいう「斜」の用例が（例えば杜甫の37字の「斜」字のうち、20字がそれである）。李賀には一例しかなく、あとは皆「ななめ」の意味で使われている。

蟄螢低飛隴徑斜 蟄螢低く飛んで隴徑斜なり

（「南山田中行」）

實際の風景としては、隴徑（あぜみち）はまっすぐに延びるものもあつたはずである。しかし無氣味な螢の飛ぶ隴徑

李賀とその詩（川合）

は、李賀にとつてやはり斜めでなければならぬ。

雲樓半開壁斜白 雲樓半ば開きて壁斜めに白し

（「夢天」）

長簾鳳窠斜 長簾 鳳窠斜なり（「梁公子」）

石斷紫錢斜 石斷えて紫錢斜なり（「過華清宮」）

このように彼の目に映る外界がしばしば「ななめ」であることは、彼の内面の、或る不安さ、不均衡さのあらわれであろうか。それはさらに、その時代の雰圍氣が鋭敏な詩人の心に與えた或る不安、ゆがみの反映であるかもしれない。初唐末期の詩人、王灣の「潮平らかにして兩岸闌く、風正しくして一帆懸る」（「次北固山下」詩）のような、安定した風景は李賀の詩中に求めがたいのである。

小論の後半では、李賀の詩の感覺的な面についてみてきた。未分化の感覺を、そしてまたものに與えられた名を無視して感覺的に捉えた代詞でものを大膽に、李賀はうたつた。

例えば匂いと光と音楽の交錯をうたうボードレールの詩

「交感」、また味覺から視覺的追憶を喚起したり（『スワンの戀Ⅰ』、皿にあてた匙の音から暑さの感覺や、森のしつとりした匂いにしめつた紫烟の香りを感覺する（『見出された時Ⅰ』）ブルーストなど、西歐の近代文學をすでに知つてゐる我々にとつてよりもはるかに大きな新鮮さを、李賀の詩は當時の人々に與えたはずである。「雙字片語、必ず新、必ず奇」（明の李維楨、『曾益注』昌谷詩解序）と感じられたであろう。そしてそうした「新奇」な詩を大膽にうたい續けた彼の根原の力となつたのは、小論の前半でみたような自己に恃む大きな自負、「自分は人と違つてゐる」という強烈な自意識、そこに求められるのではないかと思われる。

注釋

- (1) 北宋、張耒が李賀の故宅を訪れ、彼をしのんで作つた詩『福昌懷古』に「獨愛詩篇超物象」。
- (2) 『李賀年譜』（『朱自清文集』第三冊所收）李賀の事跡について、おおむねこれによつた。
- (3) 『李長吉歌詩王琦彙解』卷三
- (4) 同右卷一「南園其七」の注に「能文之士司馬長卿・東方

曼倩の如きも……」とみえる。

- (5) 五代、王定保の『唐摭言』卷十に「（李賀）年末だ弱冠ならずして内艱に丁る」というのは外艱の誤りであり、それは元和二年のことであろうと、朱氏『年譜』にみえる。正確な年代はともかくとして、早く父を失つたという朱氏の説に従う。

- (6) 『李賀詩集』225ページ

- (7) 引用した詩はおおむね『密韻樓景宋本七種』所收『李賀歌詩編四卷』によつたが、それでは「此」を「我」に作る。

ここでは『唐李長吉歌詩四卷外卷一卷』（吳正子箋註、劉辰翁評點、文政元年昌平校刊本、昭和二十七年京都大學圖書館重刊）に従つて「此」とする。鈴木虎雄博士によれば「此とは千里別をさす。」（『李長吉歌詩集』上228ページ）。

- (8) 『王琦彙解』卷三

- (9) 『協律鉤元』卷三

- (10) 卷一の中から例を挙げると、故事を借りてストーリーを再構成したものに「李夫人」「湘妃」があり、樂府題を借りたものに「蜀國絃」「大堤曲」などがある。

- (11) 曾益『昌谷集』卷四

- (12) 岩本裕『インドの說話』49ページ

- (13) 「濕螢」は『還自會稽歌』に、「濕蛭」は『昌谷詩』、「濕雲」は『巫山高』にみえる。

- (14) 『談藝錄』（香港・龍門書店一九六五年刊）68ページ

(15) この句については上尾龍介氏が「感覺の混同」という言葉で、すでに指摘されている。『九州中國學會報』第二卷『苦吟と象徴——李賀の表現手法について——』

(16) 『談藝錄』60ページ

(17) 福永武彦『詩人としてのボードレール』(『ボードレール全集』第一卷所收)

(18) 「神絃」詩の「玉爐炭火香鑿鑿」に王琦は「鑿鑿は鼓の聲なり。然るに上の五字と合わず。疑うらくは譌文有るか」と注するが(王琦注卷四)、あるいは香りの感覺を音聲的感覚で表現したものかもしれない。

(19) 『昌谷集』卷一

(20) 『李賀詩集』44ページ

(21) 『李長吉歌詩集』上110ページ

(22) 『文選索引』(斯波六郎編、京都大學人文科學研究所)

『王維詩索引』(京都大學文學部中國語學中國文學研究室編)

『李白歌詩索引』(京都大學人文科學研究所索引編集委員會排印本・花房英樹編)

『杜詩引得』(哈佛燕京學社引得特刊14)

『韓愈歌詩索引』(京都府立大學人文學會、花房英樹編)